



〔海の状況(12/16~1/15)〕

- ・小川地先の表面水温… 期間を通じて神子平年より概ねやや高め(平年差 $0.5^{\circ}\text{C}\sim 1.0^{\circ}\text{C}$)からはなはだ高め(平年差 $1.5^{\circ}\text{C}\sim$)で推移した。(図1)
- ・米ノ地先の表面水温… 12月中は平年並み($\pm 0.5^{\circ}\text{C}$)からはなはだ低め(平年差 $\sim 1.5^{\circ}\text{C}$)で推移したが、1月以降は概ね平年並み($\pm 0.5^{\circ}\text{C}$)やや高め(平年差 $0.5^{\circ}\text{C}\sim 1.0^{\circ}\text{C}$)で推移した。(図2)

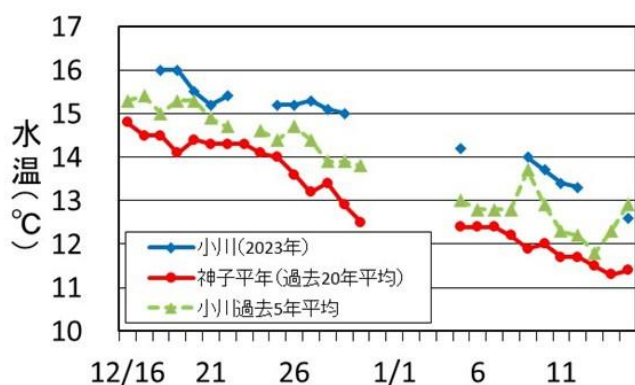


図1 若狭町小川地先における表面水温の推移



図2 越前町米ノ地先における表面水温の推移

※神子平年は1998年～2017年の神子地先の平均値である。
小川過去5年平均は2018年～2022年の小川地先の平均値である。

〔若狭湾および周辺海域の海況：12月〕

12月の若狭湾およびその周辺海域の水温分布は、昨年同時期に比べ、表層(水深0m)と水深50mでは、 18°C 以下の水域が沿岸に張り出しており、その結果 19°C 以上の水域は沿岸部に帯状に分布していた。水深100mでは、若狭湾沖西部の 16°C 以下の水域が沿岸に張り出していた。水深200mでは、若狭湾沖西部で 4°C の水域が出現していた。(図3)

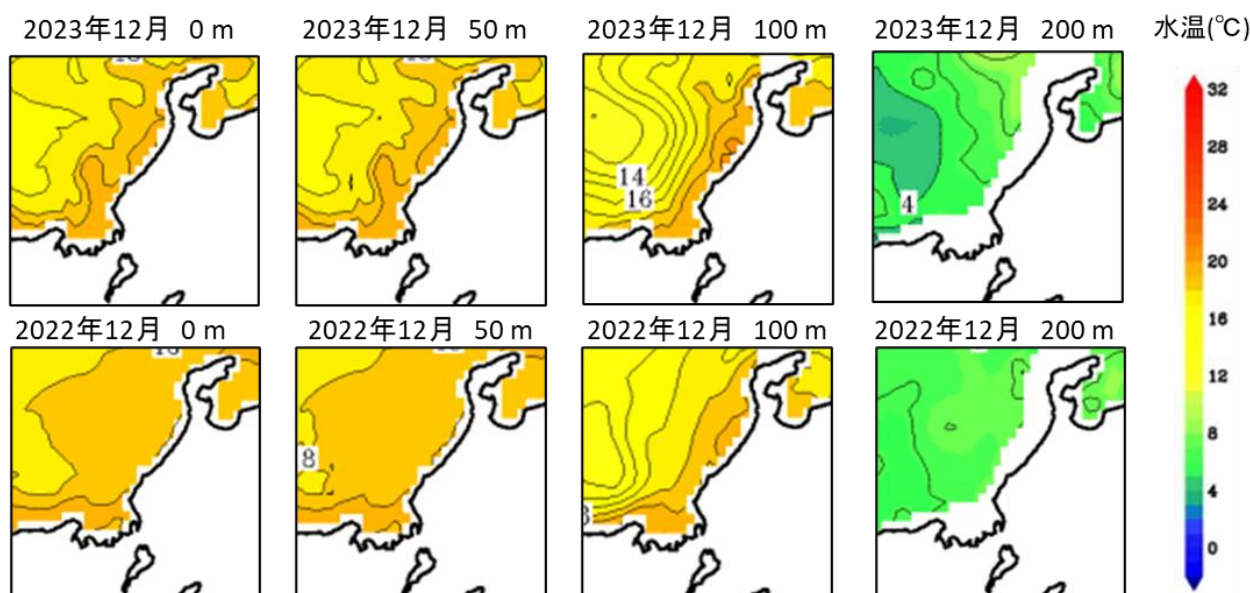


図3 若狭湾およびその周辺海域の水温分布図(海況予測システム(FRA-ROMSⅡ)による12/1の再現データ)

(漁場環境グループ 岩崎 俊祐)

「越前がに」の漁模様

12月の「越前がに」漁模様をお知らせします。

○期間中の操業延日数は713日(前年:406日)で、操業隻数は60隻(前年:55隻)でした。

○漁獲量は、ズワイガニ(雄ガニ)は40t(前年:17t 対前年比:233%)、セイコガニ(雌ガニ)は55t(前年:23t、対前年比:242%)と前年を大きく上回りました。

○12月の漁獲量が増えた要因として、漁業者が11月に漁獲可能量(TAC)管理の一環として自主規制に取り組んだ結果、資源が高水準で維持されたことが考えられます。

(漁業管理グループ 松宮 由太佳)

〔県内の漁模様：12月〕

2023年12月の県内の総漁獲量は681tで、前年同月を341t上回り、平年を33t下回った。

〔定置網〕

漁獲量は479tで、前年同月を269t上回った。ブリ類(主にブリ銘柄)、サワラ、カツオ類等が上回り、アジ類、スズキ、サバ類等が下回った。

〔底びき網〕

漁獲量は172tで、前年同月を66t上回った。ズワイガニ、セイコガニ、カレイ類(主にアカガレイ)等が上回り、アカエビ、タイ類(主にキダイ)、その他エビ等が下回った。

〔釣り・その他〕

漁獲量は30tで、前年同月を6t上回った。アマダイ、タイ類等が上回り、ブリ類が下回った。

表. 主要魚種の漁法別漁獲量(12月)

魚種名	2023年	2022年	平年	前年差	平年差
アジ類	14,424	27,266	26,883	-12,843	-12,459
サハ類	506	1,120	3,421	-613	-2,915
マグロ類	1,959	477	4,366	1,482	-2,407
カツオ類	6,242	997	29,960	5,245	-23,718
ブリ類	297,957	65,292	111,006	232,665	186,951
(ブリ)	250,723	47,520	35,106	203,203	215,617
(ワラサ)	931	5,323	8,708	-4,392	-7,777
(ハマチ)	455	1,331	8,003	-876	-7,549
(ツバス)	36,572	11,117	59,172	25,455	-22,599
(アオコ)	9,275	0	17	9,275	9,258
ヒラマサ	6,772	2,331	15,213	4,441	-8,441
シイラ	6,453	4,355	15,989	2,098	-9,536
サワラ	99,435	56,736	181,744	42,699	-82,309
タイ類	4,768	4,929	7,440	-161	-2,672
(マダイ)	2,271	2,533	5,885	-262	-3,614
(その他タイ)	2,497	2,396	1,555	101	942
スズキ	7,191	8,530	10,726	-1,339	-3,535
アオリイカ	11,667	7,981	7,024	3,685	4,643
ソデイカ	1,140	1,202	9,545	-62	-8,405
その他	20,662	28,524	38,653	-7,862	-17,991
合 計	479,176	209,740	461,972	269,436	17,205

魚種名	2023年	2022年	平年	前年差	平年差
タイ類	5,524	6,571	12,479	-1,047	-6,955
(キダイ)	4,200	5,644	8,291	-1,445	-4,092
(その他タイ)	1,324	927	4,187	397	-2,863
カレイ類	46,880	26,412	65,928	20,467	-19,048
(アカガレイ)	43,032	21,732	54,395	21,300	-11,363
(その他カレイ)	3,847	4,680	11,533	-833	-7,685
カマス	3,714	1,452	4,590	2,263	-876

※1 平年の値は2013-2022年の10年平均です。 ※2 ()は銘柄、その他カレイはアカガレイ以外のカレイ類、その他エビはアカエビ以外のエビ類です。

※3 サザエ、ナマコ類の平年値は2014-2022年の9年平均です。 ※4 メジナ類の平年値は2014年-2022年の9年平均で、一部漁協のみの集計値です。

※5 数値は小数点以下を四捨五入しています。

魚種名	2023年	2022年	平年	前年差	平年差
フグ類	1,247	1,722	1,877	-475	-630
ズワイガニ計	95,655	39,883	56,539	55,772	39,115
(ズワイガニ)	40,242	17,119	36,452	23,123	3,790
(セイコガニ)	55,413	22,764	20,087	32,649	35,326
アカエビ	2,272	11,397	14,503	-9,125	-12,231
その他エビ	2,856	3,888	4,799	-1,032	-1,943
その他	13,837	14,893	39,290	-1,056	-25,453
合 計	171,983	106,217	200,004	65,766	-28,022

魚種名	2023年	2022年	平年	前年差	平年差
ブリ類	1,485	3,110	9,487	-1,625	-8,002
(ツバス)	1,387	1,085	4,958	302	-3,571
タイ類	3,586	2,509	5,725	1,077	-2,139
(キダイ)	2,927	2,074	4,493	853	-1,566
(その他タイ)	660	435	1,232	224	-573
アマダイ	4,210	2,282	6,063	1,927	-1,853
スズキ	1,052	817	841	235	211
メバル類	959	536	1,028	423	-69
メジナ類	1,554	1,498	680	56	874
アオリイカ	700	779	633	-79	67
タコ類	1,562	1,635	3,780	-73	-2,217
ナマコ類	2,799	2,129	3,530	670	-730
サザエ	920	564	1,470	356	-550
その他	11,227	8,179	19,305	3,048	-8,077
合 計	30,055	24,039	52,541	6,016	-22,485

魚種名	2023年	2022年	平年	前年差	平年差
合 計	681,214	339,996	714,517	341,218	-33,302

〔近隣府県の漁模様〕

〔漁獲状況〕石川県：12月上旬の定置網1日あたりの漁獲量。京都府：12月にJF京都漁連舞鶴地方卸売市場へ水揚げされた定置網1日あたりの漁獲量。兵庫県：12月の余部定置網1日あたりの漁獲量。鳥取県：12月中旬～12月上旬のまき網1統あたりの漁獲量。)

石川県…定置網…ブリ類14.0t、シイラ7.7t、ソウダカツオ3.4t、アオリイカ1.0t、マアジ0.8t

京都府…定置網…ブリ類14.3t、サワラ4.2t、マアジ1.4t、カツオ類1.0t、アオリイカ0.9t

兵庫県…定置網…スズキ306kg、ウルメイワシ206kg、マアジ82kg、ツバス66kg、サワラ21kg

鳥取県…まき網…マサバ33.0t、ブリ類8.4t、マアジ0.8t

(漁場環境グループ 梶原 大郁)

アカウニの種苗生産

【はじめに】

近年、アカウニの市場価格は大幅に上昇しており、採介漁業者のアカウニ資源の維持や増殖の意欲が高まっています。そこで、福井県では、令和2年度からアカウニ放流種苗の安定的な確保を目的として、栽培漁業センターで放流種苗の生産技術の開発に取り組み、令和6年度からは、本格的に種苗生産事業としてスタートする予定です。今回は種苗生産の概要を紹介します。



写真1 採卵・採精の様子

【採卵・採精】

海水温が20℃付近となる12月上旬にアカウニの生殖巣の成熟を確認した後、採卵・採精を行っています。採卵・採精は、海水を満たしたビーカー上に口器を取り除いたウニを置き、塩化カリウム溶液を注入することで放卵・放精を促します。その後、採取した卵と精子を20L角型水槽内で受精させ、20℃で翌日まで管理します。質の良い受精卵を得るため、複数の親から採取を試み、たくさん採れた親の卵や精子を使用しています。(写真1)



写真2 幼生管理の様子

【幼生管理】

幼生管理は、顕微鏡で遊泳行動を観察し、ふ化率が高く、活力の良い幼生を1トン円型水槽に收容します(写真2)。幼生には、浮遊珪藻(キートセロス)を与えて、水温20℃で止水飼育します。そのため、残餌や糞等による水槽内の水質の悪化を防ぐため、毎日約半分ほど換水しています。幼生は、大きくなるにつれて、水槽内で沈降しやすくなるため、エアレーションの強さを細かく調整しながら約20日間飼育します。



写真3 波板(左)と着底後の稚ウニ(右)

【採苗】

幼生期(プリズム幼生、プルテウス幼生)を経て、稚ウニへと大きく姿を変える直前に、幼生を円型水槽から回収します。稚ウニの餌となる珪藻を付着させた採苗器(波板)で採苗を行い、その後、4～5mm程度まで波板で飼育します。

変態後の稚ウニは、肉眼でもはっきりと確認することが出来ます(写真3)。



写真4 カゴ飼育の様子

【カゴ飼育】

1～2月頃、波板から稚ウニを剥がし計数した後、カゴ飼育に移行します。給餌には、自家培養しているアオサや嶺南地域にある企業から頂いた廃棄レタスなどを与え、成長に応じて適宜選別を行いながら、出荷サイズ(20mm)まで大きくします(写真4)。

【おわりに】

現在、漁業者の皆様から多くのアカウニ種苗のご要望をいただいております。その要望に応えられるよう、良質なアカウニ種苗の生産に取り組んでいきます。

(育成技術グループ 綿谷 朋紘)